

モノトピーを用いた中学校美術科の実践

長友紀子

(奈良教育大学 附属中学校)

Practice of Mono-print in Junior High School

Noriko NAGATOMO

(Nara University of Education Junior High School)

要旨：美術と社会の関係性について、版画の技法の一種であるモノトピーを使った実践を通して考える。美術の作品と、作品を通じた対話によって、人と人とのつながりを感じることができるか、新しいコミュニティの形成は可能か、実践を行った。作品に表された一人ひとりの思いを感じ、集団を形成する個としての自分たちを知ることで、コミュニティと個の関係性を認識することができた。

キーワード：版画 Print 共同社会 Community 対話 Communication

1. はじめに

2011年に起こった東日本大震災において、わたしたちが考えなければならなかったことは、予期せぬ原因によって地域やコミュニティが崩壊したとき、どのようにして人と人とのつながりを取り戻し、新たな関係性を築きあげていけばよいのか、ということだった。町の施設などの箱モノの復旧と異なり、いったんなくなった人と人とのつながりを回復することは容易ではない。あまりにも多くのものを失ったあと、人が心から安心し、住み続けていくことができる場所をつくるためにはどうすればよいのか、美術を通して生徒に社会とのつながりを考えさせたいという思いから、題材設定を行った。

2008年3月の中学校美術科学学習指導要領の改訂では、改善の基本方針として、創造性をはぐくむ造形体験の充実を図りながら、形や色などによるコミュニケーションを通して、生活や社会と豊かに関わる態度をはぐくみ、生活を美しく豊かにする造形や美術の動きを実感させる、という内容が盛り込まれている。ここにある、形や色などによるコミュニケーション、つまり美術によるコミュニケーションは、言葉によるコミュニケーションとは異なり、ある場合には理屈を越えた部分で感情に直接響いて、心に生きる力を与えることができる。津波ですべてがなくなった地域に、小さな花の絵が置かれることで、人は明日を生きる希望を見いだすことができるかもしれない。美術によるコ

ミュニケーションが人に与える影響について、実践の様子を報告する。

2. 生徒の現状・実態

本実践は、2011年度、奈良教育大学附属中学校（以後、奈良教附中とする）2年生を対象に行った。この学年は、全体として非常に穏やかで、落ち着きのある生徒が多く、授業にも意欲的に取り組むことができる。実践の時期は2学期で、1学期には臨海学習をテーマにちぎり絵の制作を行っており、緻密でねばり強さの必要な課題にも、あきらめずに取り組むことができた。ちぎり絵は、臨海学習で訪れた三重県答志島の風景や産物をモチーフにして構成を行ったのだが、この題材のように、対象がはっきりとしたスケッチや、写実的な制作は得意で、細部まで観察して写し取ろうとする姿勢が持てる反面、創造性においてはやや欠けている部分が見受けられた。自由に発想し、感情を表現したり、思いを作品に反映させたりという活動においては、「何を描いたらいいかわからない」「どうやって考えればいいかわからない」といった声が多く聞かれ、発想の能力が育っていないと感じた。

2. 1. 手法、およびテーマ設定

まず、このような現状の生徒に対し、自ら考え、何もないところから新しいものを創り出す経験を積ませることが重要であり、白紙の上に見たことのない作品

が生まれる楽しさを感じさせたいと考えた。

本実践で使ったモノトピーという手法は、版画の一種である。モノプリントと呼ばれる、実際に身の回りにある様々なものをスタンプとして、自由に版を押し重ね、作品をつくりあげていく手法であるが、スタンプの材料が既存の物品であるということと、インクをつけて押す作業を繰り返すだけで確実に何かの形を生み出すことができるという点が、発想することの苦手な生徒にとってはハードルが低く、取り組みやすいのではないかと考えた。

次に、作品のテーマについては、半年前に起こった東日本大震災の記憶がまだ生々しい時期でもあり、被災地の復興、被災者の支援が連日さまざまなメディアで取り上げられていた状況から、「作品を通して人のこころを支えることができるかどうか」、「美術を通して社会に何ができるだろうか」、という2点を大きな軸として設定を行った。本学年は、現在の社会におこっている事象に対して問題意識を持とうという気持ちの強い生徒が多い。これは奈良教附中の代表的な行事である「平和の集い」の取り組みとの関係もあると思われるが、特に2011年度は「平和の集い」で震災について考えようとしていた時期でもあったため（2011年度の「平和の集い」は10月実施であった）、普段は自分の思いを形にすることを苦手とする生徒にとっても、実感をもって取り組みやすいテーマであると考えた。

2. 2. 仮説

題材のタイトルは、「あったらいいな森をつくろう」とした。ひとりひとりが、それぞれ一本の木を想像し、その木が誰のためにあるのかを考えて、モノトピーの手法で制作する。それらの木をクラス分集めてみたら、どんな森ができるだろうか。ひとりひとりと思う「あったらいいな」が集まって、「ここにいたいな」と思える森、言い換えると、新しい人と人とのつながりの場（コミュニティ）が創造できればよい。

また、ゼロから作品を生み出し、自分がつくった作品の意味についても自ら考えることで、創造する満足感や楽しさを感じること、見本や手順なしで、発想・構想をふくらませ、実際に形にして、それを肯定することができる力を育てることで、彼らが社会に出たあと、さまざまな問題に向かって自ら行動し、解決しようとする姿勢をもった大人に育てたい。明確な答えのないことが美術科の学びの特性のひとつであるが、これを、実際の社会の中で必要な生きる力につなげることができると考えた。

3. 実践内容

3. 1. 学習計画

題材 モノトピー～あったらいいな森をつくろう～

目標

- ・ 思いを深め、自由に発想する力を養う。
- ・ 発想を形にし、相手に伝えることができる。
- ・ 友だちの作品を、作者の意図を感じながら鑑賞することができる。

指導について

モノトピーはもっとも単純な版画の一種である。身の回りにあるものに、なんでもインクを塗ってハンコのように押すという作業を体験させ、この技法の面白さを感じさせる。自分の思いや発想を形にすることをためらわない気持ちを育てるために、試作を何度でもできるように準備をしておく。失敗を怖がらず、思いついたことをなんでも試すことができる環境づくりを行って、生徒の気持ちをほぐした状態で授業をすすめる。

材料に関しては、できるだけ幅広い材料を準備しておき、それ以外に何か使いたい物があれば自由に持ってきて良いという形をとる。教師が思いつかなかったような材料を持ってきて判を押し、発想を形にできる生徒がでてくれば非常に良い状態である。技法としては、最初に実際に紙にスタンプを押す作業を実演してみせ、インクのつけすぎや押しの足りなさからくるかすれなどのないように注意をする。スタンプの押し方は、できるだけ生徒が自分から押し方を発見することを待ちたいが、適宜アドバイスや実演を行って、新しい押し方を見つけられるように導いていく。インクは共同作業机に用意し、個人機と行き来をしながら制作を行う。このとき、友だちの作業を見ることで刺激を受け、発想を広げていくことができるように、作業状況をみながら配慮していく。

生徒は、「正しいこと」をしようとする気持ちが非常に強い。そのため、何か思いついて制作をしようとしても、「これで合っているのか」「間違っていないか」ということを、指導者に何度も確認をしてくる。指導者は、生徒が制作の基本的な方向性から逸脱しないようにだけ配慮をし、その他はできるだけ短く、肯定的なアドバイスを行って、生徒の自発的な発想の形を大事にしたい。制作中は、テーマについて考えた思いを確認することを繰り返し、どんな気持ちをこめた作品にしようとしているのかを常に意識させるような声かけを行う。

学習計画（全4時間）

- 第1次 テーマについて考える。学習のねらいをつかむ。「あったらいいな」の木はどんな色や形をしているだろうか。
- 第2次 試作を行う。技法に慣れる。
- 第3次 本番制作。試作から生まれた発想を、テ

マについての考えに還元しながら、新たな発想をうむ。発想→制作→発想→制作を繰り返す、最終作品を完成させる。

第4次 完成した作品を美術教室の床に並べ、全員で鑑賞する。それぞれの木が集まってできあがった森は、「あったらいいな」という気持ちにさせてくれるかどうか。テーマが達成できているか、自分の作品をふりかえる。

評価規準

- ・テーマを理解し、豊かに発想することができる。
- ・自分の思いを色や形を使って表現できる。
- ・友だちの作品から思いを感じ取ることができる。

3. 2. 第4次の実践より

仮説で述べた、本実践のポイントについて、特に第4次を取り上げて報告する。

本時の目標

- ・友だちの作品から思いを感じとることができる。
- ・感じとったことを自分の言葉で表現し、友だちと対話をする事で作品をより深く味わう。

展開

学習内容	学習活動	指導上の留意点
1. 導入 鑑賞の用意	作品を床に並べる。 ワークシートを受け取る。	できるだけ向きが揃わないように、全方向から鑑賞できるように配置する。
2. 鑑賞	15分間、自由に鑑賞する。	全員の作品を見て、できるだけ、友だちと会話をしながら鑑賞するよう促す。
3. 発表	作品の周囲に座り、順番に感想を発表する。	具体的に感想を述べるよう指示する。 なぜ自分がそう感じたのか、適宜質問をはさみながら感想を引き出す。
4. まとめ	鑑賞シートの記入を行う。話した内容を具体的に整理する。	思いがうまく言葉にできない生徒には、個々に質問をして、できるだけ具体的に、記入させる。

生徒の鑑賞シートより

木が森になって感じたこと

ひとつひとつの木を見ると全然違う木なのに、全部ひとつに固めると、不思議な一体感みたいなものがありました。一口に木といっても、みんな想像する木は全然違うし、それを見た人がこう思って欲しいという気持ちも違うと思います。でも、みんなに共通して言えるのは、見た人が不愉快な気持ちにはなっていないと思っています。木を見るたびに気持ちは変わったけど、そんな気分にはならなかったからです。みんな、人のことを考えていると思います。 生徒 a

これらは全て、自分たちの心を表していると思いました。自分が少し恥ずかしがりやだと思う人は、そのような作品になっていました。自分がこんなものをつくりたいと思っていたけど、それは自分そのものを表しているんじゃないかと思いました。僕の場合だと、もしかしたら優しい気持ちで人と接するようにしたいという願いが作品を生んだのかもしれない。 生徒 b

一人一人が作った木を森にするって、どういうことなのか？と思っていて、森というイメージがつかめなかったけど、一人一人の木を森にしたときに、森っていうのは同じようなものが集まってできている、というわけでは決していないんだな、と思ってすごく感動しました。木として単体でとらえるより、森というものにすることで、すごく心が動かされました。 生徒 c

直接相手に言えないことを、このような方法で表してみたら、とても面白いと思いました。バラバラに置くのではなくて、色とか形が似ているものを集めて、三つのゾーンに分けて見ると、また別の森に見えてくると思います。配置をかえてみたら、もっと別の森になると思うし、その森から伝わってくるものも少しずつ変わってくると思います。 生徒 d

美術教室の床に全員の作品を並べると、自然に生徒たちの間から「すごいなあ」「おもしろい」と声があがった。こちらが特に働きかけることもなく、自然に鑑賞が始まった形である。そのまま15分ほど自由に、友だちと会話をしながら鑑賞させ、その後、全体で感想を述べ合う時間を設けた。くると作品の周りを回って全体を鑑賞しようとする生徒や、自分や友だちの作品を比較して、意図を話し合う生徒、特に目に付いた作品について、「あの作品がおもしろい！」と友だちに熱心に語る生徒など、全員が自分たちの作品が集まってできた場から受ける印象に、生き生きとした

反応を示していた。

鑑賞シートから考察すると、生徒cは、集団にスムーズに入ることの困難さが学年を重ねる毎に出てきていた生徒で、本題材も、最初はあまり積極的に取り組んでいなかった。しかし、最後の鑑賞の場面で、一人ひとりの木が森になった様子を観て、他と同列に扱われる均一な集団であり、そこに混じることには抵抗を感じていたクラスというまとまりの中に、他者に唯一の個として認識される一人の人間が存在するというのを感じて、心を動かされた様子が見られた。自分が認められているという意識が芽生えたことで、クラスというコミュニティを受け入れることができたのではないだろうか。

生徒dは、落ち着きがあり、年齢に見合った成長をしている状況で、作品の鑑賞に客観的な視点をもって取り組んでいる。個が集まってコミュニティを形成していることや、個の集まり方が変わればコミュニティの性格も変わってくる事を、作品を通じて感想として述べている。こういった生徒の感想を、他の生徒に還元することで新しい効果が生まれてくるように思う。

作品1や作品2は、東日本大震災で被災した方々の気持ちや、自分の周りの家族や友だちの気持ちを意識した作品となった。このタイプの作品を発想する生徒が多く、題材の意図を理解して素直に制作した形である。作品4は、さらにそこに自分なりの発想が加えられたタイプで、被災者の方々や、悲しみや苦しみを感じている人々には、どんな木があったら元気づけられるかを考えて具体化している。今回の制作では、木の形のみからは作者の意図を完全に捉えることが難しく、この作品のように、タイトルや、作者のコメントが鑑賞にあたっての重要な要素となった。美術において、言葉の扱いについても考えていかななくてはならないが、対話を重ねて鑑賞した、今回のような題材の場合は必要な量の言葉であったのではないと思う。この作者のコメントを聞いて、より深く作品を味わうことのできた生徒もいた。

作品3は、自分の思いをそのまま形にした作品である。ドライバーの形を使って強い主張を表現しており、モノトピーという技法の特徴をうまく生かすことができている。このタイプの作品は、モノトピーならではの表現であろう。

4. 考察

4. 1. 成果と課題

ひとりひとりが思う「あったらいいな」が集まって、「ここにいたいな」と思える森、言い換えると、新しい人と人とのつながりの場（コミュニティ）が創造できれば、本実践における生徒の学びは達成できたと言える。それぞれの個性が集まって、ひとつの集団

のまとまりが表現されたと感じた生徒が多く、そういった意味では意義のある学びになった。制作過程では、試行錯誤を繰り返しながら、自分だけの木をつくらうという意欲が見られ、発想し、創造する能力についても一定の成果は得られたのではないだろうか。作品を肯定的に見ることができたかについては、友だちの作品は肯定的に受け止められても、自分の作品に関しては失敗した点や良くない点を指摘する生徒もいた。しかし、自由に鑑賞する時間に、友だちから作品についてほめられたり、良かった点を言ってもらったことで、「そういう見方もできるのか」というように意識が変わった例や、自分の作品が大きな森の一部になることで、周りの作品との関係の中で自分の作品の良さに気付く例もあった。

課題としては、個々のテーマについての深まりがやや不足しており、単に自分の個性を表す「あったらいいな」の木を制作した生徒が見られた点をあげる。自分のことだけでなく、東日本大震災など、身の回りにおきている様々な出来事をふまえて「あったらいいな」を考えるとどこまで到達できない場合もあった。そのため、個性（自分や友だち）の集合体としての集まり（クラス）については思いを深めることができたが、他者とつながりあってひとつのコミュニティをつくりあげる、といった、題材設定時の仮説を実現するには、題材やテーマづくりの過程において、さらに工夫が必要であると感じた。

制作過程の課題としては、美術教室で用意した材料のみで制作する生徒が多く、自分の発想を実現するために、自ら材料を集めてくる場所まではできなかったことがある。モノトピーは、材料の工夫があればあるほど面白い作品ができるので、この点は残念だった。

4. 2. 題材の改善について

成果と課題で検証したように、本実践で出た課題としては以下の点があげられる。

1. 個々のテーマ設定の指導方法
2. 材料の工夫
3. 美術と社会の関係性を考えることができたか

1の、テーマ設定の指導方法については、題材のタイトルの工夫や、常日頃から身の回りの出来事に意識を向けておく姿勢を育てることなどが重要になってくる。問題を、自分とその周辺のみ狭い部分だけで認識するのではなく、自分が置かれている社会と自分自身の関係性を意識することができるよう、美術以外の教科や学級活動における取り組みとの連携が必要であると思う。

2の、材料の工夫に関しては、技法説明のときにできるだけ幅広い事例を用意し、面白さを感じさせることがポイントになってくる。スタンプを押して形ができることの面白さをもっと感じれば、生徒は自分から

「これも押してみたい」「これを押すとどうなるか」と考え、実行するだろう。制作の楽しさを感じさせる導入を工夫して、改善をしていきたい。

3の、美術と社会の関係性については、生徒の鑑賞シートにあげた例から、ある程度は美術を通じて人との接し方やつながりを感じることができたように思うが、もっと明確に人と社会のつながりを美術の面から考えるために、モノトピーを使うことが良いのか、このテーマ設定がよいのか、さらに実践をふまえて検証する必要がある。

本実践で使った技法・モノトピーは小学校の図画工作でも使うことができ、幅広い年齢に対応する。テーマ設定次第で、非常に意義のある学びとなるので、今後さらに実践を重ねていきたい。

5. 終わりに

美術は、ともすれば好きか嫌いかで終わってしまい、学校を終えて社会に出た後は趣味的な意味合いでしかとらえられないことが多い。美術が社会に対して果たす役割はどこにあるのか、美術科の学びが人間形成に与える影響について考えていくことが、今後非常に重要になってくると考える。本実践で、美術を使ってコミュニティ形成ができないかどうか、小さな実験を行ったつもりである。奈良教附中の生徒たちは、制作を楽しみながら、美術を通じた人と人とのつながりを感じていたように思う。生徒たちの人生が、美術の存在によって豊かになるような学びができるように、今後の題材づくりにおいても、美術と社会のつながりを意識していきたい。



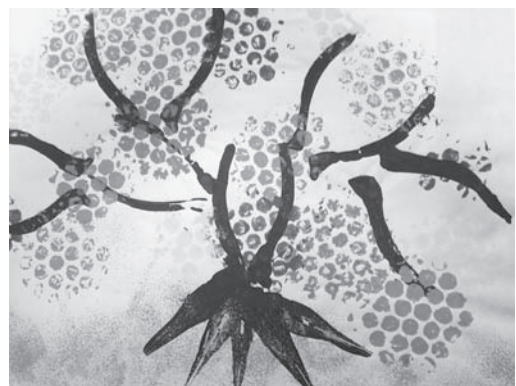
作品1 灯りのともる木 みんなの気持ちが明るくなるように。



作品2 げん木 元気と木をかけた木



作品3 電木 これがあれば、原発もいらない。



作品4 TELツリー 幹の部分に穴があって、そこに頭を入れると亡くなった大切な人と話ができる。